

1 網走の雪像づくりについて

雪を生かした実践として、雪像づくりに取り組みました。

北海道における雪は除雪の対象など邪魔者のイメージがありますが、作品を作る際の「素材」として見た場合には様々なメリットがあることに気づかされます。ここでは、網走の雪像づくり実践を紹介します。

2 実践記録

(1) 残雪を活かした雪像

雪解け間近の残雪の形に着目し大きな作品を作りました。子どもたちに「それがいったい何に見えるのか」を自由に想像させ、スコップで形を整え、雪を少し足し、スプレーで着色して雪像を完成させました。

制作後にロウソク点灯会をすることで、夕方からも楽しい作品鑑賞会ができました。



まず、窓の外に見える ○ の残雪に着目させ、自由に想像させます。

この残雪は、広場の片隅にあり、ショベルカーで押しやられたものです。



次に、残雪が何に見えるかを手がかりに、それぞれがデザイン画を描きます。

4年生の男子の子は、「カメ」に見えると発想してデザイン画を描き、これを手がかりに雪像づくりを始めました。



スコップで形を整え、水彩絵の具を溶かした液体をスプレーの中に入れて、着色しました。

この日は、風もなく、穏やかだったので比較的作業は順調。スプレー作業は人気があり、子どもたちが争うように作業を楽しみました。



スコップで削る → 雪を足して形を整える →
スプレーで着色する
(この作業は2時間ほどで終了)

「カメゴン」が完成すると、子どもたちはとても喜び、木に登りでき映えを鑑賞していました。



夜になるとロウソク点灯会が始まりました。

夕闇の中でロウソクの光に揺れる大きな作品は妖しい存在感をもち、子どもたちや保護者の目を楽しませていました。また、一週間後には太陽や自然の力によって、他の残雪より早く地面に消えました。

◆成果として

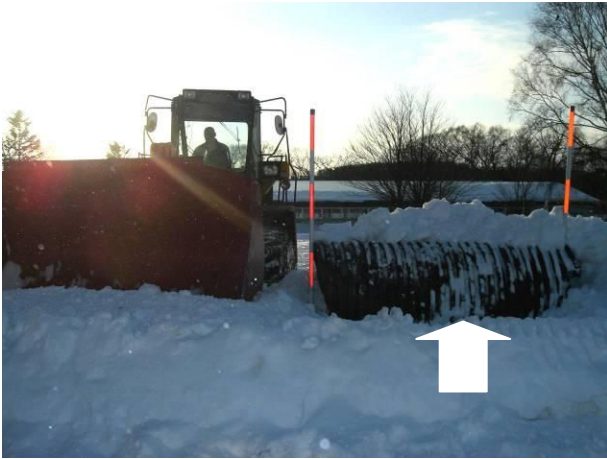
- ・残雪の形を生かした制作をしたことで子どもの発想も十分に生かされ、大きな造作物のわりに短時間（3時間程度）で制作することができた。
- ・子どもたちがスプレーの着色作業をとっても喜んで行い、ダイナミックな雪像づくりを楽しむことができた。
- ・夕方の作品点灯会には、多くの子どもが訪れ、昼間とは違う作品の姿や光の芸術性を楽しむことができた。
- ・作品は着色したため数日で消えてしまったが、デジタルカメラで撮影し掲示することで、長期間鑑賞することができた。
- ・着色したことで残雪の融解を早め、絵の具も自然分解されて、片付けは一切必要なかった。

(2) 地域素材を活かした雪像

網走小学校1年生56名では、網走に毎年水揚げされる「ツチクジラ（体長10メートル、重さ10トン）」を題材にして、近隣の企業や保護者の協力を得ながら、雪像を作りました。この雪像は、単にツチクジラの形をしているだけでなく、トンネルが通っていて、お腹をくぐることができます。



この写真がツチクジラ。網走では、主に商業捕鯨として毎年4頭水揚げされています。



埋設排水用の配管を雪の中に埋設する。

これを埋設しておくとなんネルが容易にでき、また崩落等の危険を回避できます。地域の企業の協力を得ました。



波付加工管（カナダブル）という埋設排水用の配管を利用



雪積みされた山を子どもたちが米袋をお尻に敷いて滑り、クジラの背尾根を遊びながら削り出していきました。

遊びながらの作業は、子どもたちが大いに楽しむことができ、休み時間も引き続き自主的作業？が続いていました。



「クジラのお腹にトンネルを掘りたい。」という子どもたちのアイディアを実現するため、心を一つに協働作業が進められました。

スコップで掘る子ども、掘った雪をソリに載せる子ども、ソリの雪を運ぶ子ども…。それぞれが分担を決めて、力を合わせて作業することができました。



ついに、トンネル貫通！

お腹の中の波付加工管は、大人でも通れるサイズなので、子どもたちが中ですれ違うこともできました。子どもたちは入っては出る、入っては出るを繰り返して、いつまでも楽しんでいました。



クジラの雪像（通称：びっくじら）で遊ぶことに飽きた子どもは、校庭でソリ遊びや雪合戦などをして遊ぶようになりました。

クジラの雪像ができたことは、子どもたちが校庭に出るきっかけになり、いつもの冬に比べ、休み時間に校庭で遊ぶ子どもが多く見られました。

◆成果として

- ・楽しい体験的活動を通して、雪国の自然素材である「雪」に親しむことができた。
- ・子どもたちがみんなで一つの造作物を作る経験は、協働の意味や価値を味わわせることにつながった。
- ・身近な自然である「雪」や「オホーツク海」、「クジラ」というものに興味関心を抱かせ、そこに楽しい思い出を作ることができた。
- ・タッチクジラ10mという実物大の雪像を作ることによって「量感」を養い、自然の偉大さを感じさせることができた。
- ・近隣の企業の協力を得て、国語科「はたらくじどうしゃ」の時に学習したホイールローダーが雪積み作業をしたため、自動車に対する子どもたちの興味関心が一層膨らんだ。
- ・雪像ができたことをきっかけに、休み時間に雪の校庭で遊ぶ児童が増えた。

3 造形素材としての雪のよさ（油粘土と比較）

項目	雪	油粘土
大きさ	大きな造形活動ができる	粘土の量に限定される
材料費	無料	有料
作業場所	屋外（寒い）	室内（温かい）
片付け	活動場所を配慮することで片付けが要らない	片付けや油を落とすための洗剤が要る
鑑賞	ロウソクなどの点灯など工夫することでダイナミックに鑑賞できる	廊下や教室の片隅などでの鑑賞が多い

4 まとめ

さっぽろ雪まつりは日本を代表する雪の祭典であり、北海道内のみならず、日本全国、あるいは海外からもおよそ200万人もの観光客が訪れる大規模なイベントの一つです。「雪」を素材に作った大小の雪像を見るため、はるばる多くの人々が訪れるのは、雪のもつ「美しさ」「冷たさ」「白さ」「柔らかさ」「堅さ」「滑る」「不思議さ」などの特殊性に惹かれるからでしょう。

日本の国土で、「雪」を学習材とできる地域は限定されることは周知の通りですが、「雪を克服する」ばかりではなく、「雪を活かす」という視点こそが北海道らしさであり、道民の英知であると考えます。雪像づくりなど、小学生の時から「雪を友だち」にできた子どもは、そのよさを生かす感性を育むことと確信します。雪像づくり等、雪に親しむ活動が北海道の学校に広がり、未来を生きる子どもたちに前向きな感性が養われることを願ってやみません。